

きざらざら

NO.126
月刊

昭和四十二年十二月一日 発行 (非売品)
岡山県都窪郡吉備町東町 宇垣方
吉備 観光 協会

大田多三郎系譜

大田惣右衛門邦重

宝暦三年一月廿日北六十三才

妻 某 安永九年二月八日北七十六才

大田惣右衛門判忠

文化十三年八月廿四日北八十四才

妻 某 文政元年七月廿九日北七十九才

惣次郎 明和九年一月十日北三十六才

妻 某 享和三年十二月四日北四十三才

市左エ門重光 文化十五年十二月一日北五十九才

妻 某 寛政十年九月八日北三十九才

惣右エ門 享政五年七月廿九日北八十七才

妻 某 文久三年三月六日北八十四才

宗十郎重徳 明治四年九月十八日北七十九才

妻 某 明治廿五年九月廿六日北八十六才

都守郎吉新田吉田孫平次郎の長女

妻 某 弘化二年四月五日北六十一才

有一 菅太郎

長女

紋四郎 明治元年八月廿日北六十一才

妻 某 弘化二年四月五日北六十一才

多三郎 嘉永二年四月一日生 昭和三年二月九日北八十八才

有一 菅太郎

同村大田喜三兵衛の三男

安政四年一月十九日生、多三郎の妻

まぢ 鬼島郡山田村佐武太三郎に嫁ぐ

博 明治四十二年十一月四日北十才

安哉能 大正九年十一月廿九日北廿六才

むつ子 六女 昭和十九年八月四日北廿二才

信夫を養子とすむつ子北信信夫は岡山に別居レ山陽新聞社に勤むとシテ。

信夫を養子とすむつ子北信信夫は岡山に別居レ山陽新聞社に勤むとシテ。

宗忠は安永九年十一月廿六日冬至の日旧御津郡今村の今村宮の禰宜を勤仕する

黒住宗敏の三男として生れた。他に長兄は出でて他家を継ぎ次兄も亦東京にお

り宗忠が父の職を輔けて神に奉仕した。文化九年俄々に両親を喪い悲歎のう

ちに神仕えしてソたが翌年宗忠は肺患にかり痲痺は重くなつたが、自う食事

を懐み、日光を浴レ神を祈つて心を養ううちに次第に恢復レ文化十一年痲痺は癒

えた。時に宗忠は三十五歳であつた。宗忠は天地は同体にして神人は二ならず、天地

の化育に参じ、神人の至徳を全うする皆自らの道あり、道を貫くは誠を以て

す。誠を措いて道なし、日月照臨レ万物成育す。是皆天地の誠なり、誠の本體

は神これを受け人傳ふ、人何ぞ誠ならざるべけんや。と、後ち弘化三年

昭和十五年十二月廿六日 北六十六才

昭和十五年十二月廿六日 北六十六才

昭和十五年十二月廿六日 北六十六才

一は岡山藩士を始め多くの門人が相結ぶ一集團を形成した。かくて宗忠は嘉永三年の二月廿五日疾を得て年七十一歳で他界した。後方安政三年の三月八日吉田神道宮より宗忠大明神の神号を奉告せられた。又文二年二月廿五日京都神楽岡に奉祀せられた。慶應元年四月十八日には勅願所に定められた。翌二年二月七日には神階従四位下女宣下せられたのである。

本方は明治五年八月門人等の手によりて黒住講社が組織せられた。大改廢に附屬して黒住講社講義條目も許可せられたが、同在年に存する別派独立を許可せられた。同十五年に黒住教と改められた。現在の黒住教は明治四十一年四月の改正によりて教現及教則に準據して統括せられたものである。宗忠神社は祭神天照大神外八百萬神と教祖宗忠神を奉祀してゐるのである。(第三輯 寺院誌 清水山松林寺御影太神宮参照)

○ 天理教吉備岡分教会

同教会は奉明七一一番地にある。もと庄村松島の出身和氣一太が昭和十年十二月十六日總音堂六八一番地中田屋棟柳の家屋を借り受て布教したのが始りである。現在の庵に移轉したのは昭和二十九年四月十日のことである。これは信者たちの津路を集めて民家を購入して祭祀したのである。二れは

當時は僅かばかりの信者であったが、昭和三十六年一月十日石川県金沢出身の倉田義政が和氣一太のあとを継いで教會長になつてから現在五十戸はなりの信者をも有してゐる。

×

天理教は奈良県天理市に本部がある。教祖中山みき女は奈良県山辺郡三昧田の庄屋前川年七正信の長女として寛政十年四月十八日の生れである。文化七年九月十五日十二歳で庄屋村の農中山善兵衛に嫁いだ。三人の子をもうけたが夫善兵衛は嘉永六年二月廿二日六十六歳で没した。この時みき女は五十六歳であった。切方の境から神佛を敬い夫の死後益々その道に精進し屋敷全部を売却して大段の道場場に出で街道に立つて「なむ天理王命、なむ天理王命」と唱えながら道行く人々に神の教をお説いたのである。慶應三年七月廿三日多くの信者が相つぎ一團となつたので、京都吉田神祇管領より教義條目のほかにも布教の教許を得たのである。京都吉田神祇教祖は明治廿年一月廿六日九十九歳で出直(死志)されたのである。

○ 金老教庭瀬教会所

同教会所は京町六四五番地にある。起源は明治の末期に上道郡三幡村江並(いま岡山市)の片岡光五郎という人が觀音堂の中田屋(姓は横畑)の家屋を借りて十人はかりの信者と教会を開いたのが始まりである。文正二年頃に信者が増加し狭隘になつたので新しく教会所を建てること企てて約四千円を基金として建築し金老教の教道に努めたのである。

片岡大五郎は昭和十六年七月九日六十二歳で他界した。一時江並の北村福が小教会長として勤務したが、大五郎の次女で松尾道正という人に嫁り、静恵は其のあとを継いで教会長となり、ついで静恵の夫道正がこれに替り、静恵を説いて、たが昭和三十一年十月廿九日他界した。よつて長男の武彦が片岡家を継ぎ、現教会所長に就任して今日に至つてゐる。

現在信者は二百名あまりである。

金老教の始祖金老太郎は文化十一年(一八一四)八月十六日備中国茨口郡占尾村香取(かんとり)(金老町)農業を営む香取十平の二男として生れた。幼少の時は大治とつた。文政八年四月十日十二歳になつて川手家に養子となつたが、孝心の念深く、人のために骨身を惜まらず面倒をまよくみる性質であつたが、壮年になつて一家に不幸が続き、殊に文治は四十二歳の時大疾に患ひ、生死の境をさまよつたが、床の間に金老神を勧請して日夜信心に念念をなく、靈感を受せん心眼は開けて天地本体の親身の御徳を体得せうと立教神堂を拜せうとされたのである。神に奉仕すること二十余年の長い間、門外には一歩も出でず、信仰一筋、ついに明治元年五月十日神道官より金老太郎の神号を授けられた。遠近より大陣の教を慕ひ、多くの信者が参集した。同十六年十月十日大陣は六十九歳で帰出されたが、その子川手宅吉がその教を嗣ぎ、同十八年四月十日に金老教会を開いて多くの子弟を教養した。同廿三年六月十日神道官より金老教独立の裁許を得、三和村大字本郷崎山(中ノぎきやま)の社殿を新築し、金老教の教義を廣く全国に布教し多くの信徒を有するようになったのである。

五 六

神談神訓 (梗草)

真道の心得

- 一 神國の人に生れし神々皇おとの大恩を知らぬこと
- 一 天の恩を知りて地の恩を知らぬこと
- 一 幼少の時を忘れし親に不幸のこと
- 一 真の道に居りながら真の道を履ぬこと
- 一 口に真を語りつつ心に真の無きこと
- 一 我身の苦難を知りながら人の身の苦難を知らぬこと
- 一 腹立ば心の鏡のくもること
- 一 人の不行状を見え我身を討つこと
- 一 物事に時節を待たず若をすること
- 一 壯健な時家業を疎にし物毎に驕ること
- 一 信心する人の真の信心なきこと

○ 西光山西弘院

以上

当院は真言宗にして下撫川一四一六番地にある。もと大橋ニニ五番地にあつたが、足守川改修工事のため川床となり他に移轉しなければならぬ事情となり昭和四十年四月に現地に再興したのである。

当院の起源は御津郡大野村(岡山市)の浅沼彦十郎の子で老善といふ人が創建したものである。老善は五人の兄弟の末子を父の彦十郎の老善は池田藩に仕えた家筋でかなり嚴格なしつけの家柄に育つたといふ。長兄は行方かわからず次兄は尾美事件に出征して歿した。老善は廿五歳になつた時に妻は肺を患ひて歿するなどなにかと不運が連続したので御道に祭心高野山にのほり塔中上池院に入りて四年間の御道を修行し昭和十三年頃に許可を得て開創したが、昭和四十二年六月廿五日六十二歳で歿した。よつて後添いの明香が法灯を継ぎ今日に至つてゐる。

当院は無縁寺にして檀家は一軒もなく専ら加持祈禱を修法してゐる。

○ 塚山の石地藏尊

塚山は吉備町最高部の部落にして桔軒ばかりの農家がある。藩政時代には撫川(矢部鼻)から早島の三津へ出で鬼島宇島へ至る唯一の峠道である。現代は明治中期に拓かれた三谷越の山道が開かれしころ。

塚山には古く紀壇の古墳が山中にあり、先住氏族の住居地であつたことが窺われ地名もこれに因るものである。また毘沙門天を祭る毘沙門山の丘上には古來毘沙門

堂があつたが大正四年に建物が朽壞したつて御尊像は不変院に遷祀したとす。また附近の古墳から瓦片掘れた別荘品の数々が保存されてゐたが、一日蓮昌寺の山僧の時全部持ち帰つたといふことである。

峠には藩政時代数軒の茶屋があつて旅人の憩ひの場所として晝間で酒客のさんざめく聲が三味線の音にあわせて遊興に賑つたものである。

峠をサレ南に下ると左側に池がある。このほとりに蓮弁形に浮彫りした高さ一六五種の地藏尊が一基、自然石の上に置かれてゐる。

台石の表面に「嘉永元年申十月 住持人 白尾屋善造 鬼島屋源太夫

糸屋清太良 油屋 和吉

市場屋徳右エ門 中島屋 弥吉

西屋 栄助 東屋彦四良

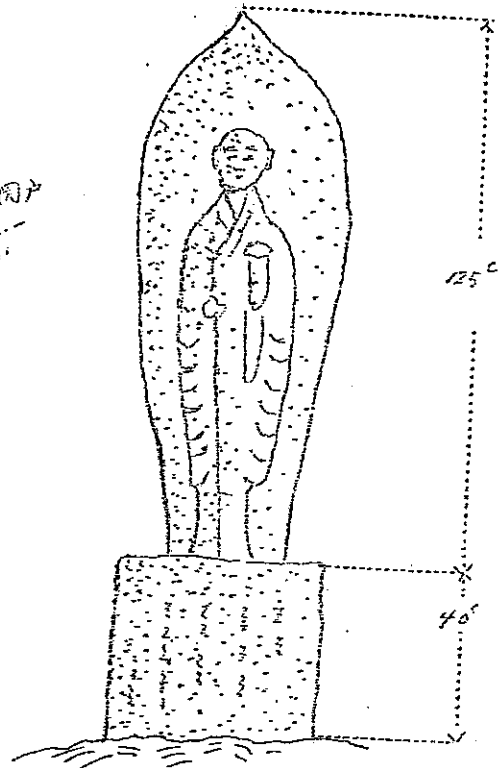
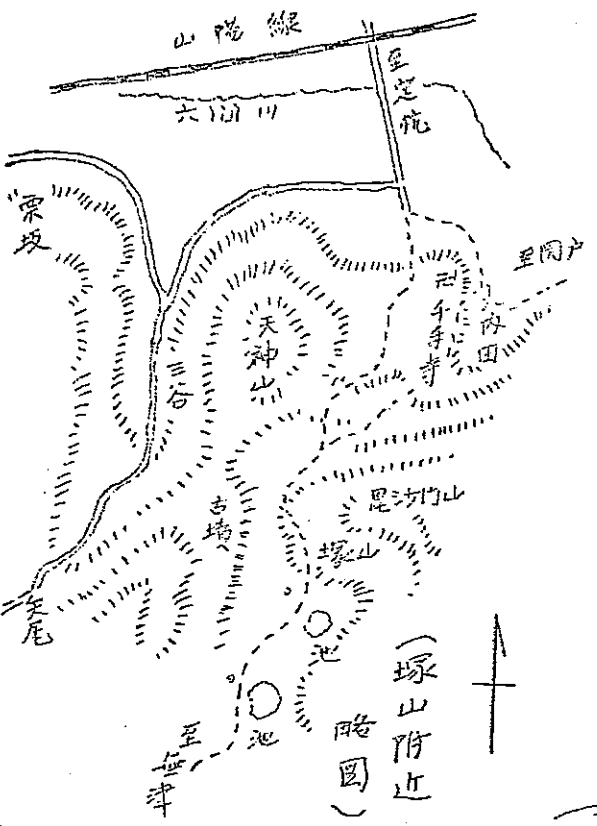
この石地藏尊から数十米つた右側の路傍に一つの供養塔がある。高さ七十三種、三十種角にして自然石の上に置かれてゐる。

正面 「天下泰平國家安穩 奉唱 老明真言 三指萬遍」

右面 「安政五年五月建之 四國 西國 順拝」

左面 「願主 早島清月意 照信士」

の銘がある。これより更に数十米進むと町境に出る。道路の右側に石地藏尊が一基、自然石に置かれてゐる。台石は横五十八種、縦五十一種、高さ四十種あ



リ、その上に蓮弁形に地藏尊が浮彫されてゐる。その高さは百二十五釐である。池のほとりにある石地藏尊建立にフツク花ヲ話ヲ伝わつてゐる。

幕末の弘化の頃に中権川に住んでゐる河某といふ者が所用のため再び早島村へ往來する時、この峠を越えてゐた。町境に一軒の茶屋があつて往來する人は必ずこゝにたゞと腰を休めてゐた。この茶屋に一人の茶屋女があつた。なんでも讃岐の國からきた貧乏のひとりの娘であつた。父半の頃十八九歳、名をお辯といひ、きたてがよく別嬪の子で近在の若者の評判娘であつた。常にお客の席に出る酒の相手をしてゐた。そこで誰れ云うとなしに、この茶屋をお弁屋といつてゐた。河某は往來のつどこのお弁屋の暖簾をくぐるうちに美貌のお弁を思ひ染めて甘い言葉をお弁を交すようになり深い仲になつた。そしてなにかとお弁に肩入れするまゝになつた。河某は二十八歳、もとより妻子のある身の上であつた。お弁のことがいと時忘れられず、通ううちに深く契りを結んだ。二人は、ある日の真夜中添いとげらうぬ御寒を精算すべく、思ひあまふ二人は宿を後にした。暗い山道を歩くと池畔に佇み、御佛に合掌し未來を託して共にしかと抱き合ひ暗闇の水面に飛び込んで消え失せたのである。

村民はその翌朝死屍を引き上げた。その悲哀を思ひ有志のものが相計つて永遠に二人の冥福を祈るためにここに地藏尊をたてたのだと伝えられてゐる。

(おわり)

九

各種二・三輪 販売と修理 吉備町 中田	各種二・三輪 販売と修理 吉備町 中田
	平松モーターズ 電話一〇二五三 有線一〇九
運送の御用命は 丸中運送	
吉備町・下撫川 電話三〇一七八	

終わりのことば

永らく愛読を戴いておりました「吉備の里」は第一二六号を終り
として一先づ打ち切ります。何かとお役に立てば望外の幸甚です。百子
御礼申し述べます。しかる養生性分として焼かれる日かゝるまで研
究はやめませんから、何卒同行の志の御支援をお願いいたします。

No. 126
完結